第2章 【歴史編】日本型教養主義の来歴

竹内洋×大澤聡

竹内洋（たけうち・よう）
1942年生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学。現在、関西大学東京センター長。関西大学名誉教授、京都大学名誉教授。歴史社会学・教育社会学を専攻。主な著書に『日本のメリトクラシー』（東京大学出版会）、『革新幻想の戦後史』（中央公論新社）、『学歴貴族の栄光と挫折』（講談社学術文庫）、『教養主義の没落』（中公新書）など。

竹内洋さんの『教養主義の没落』は教養論のパラダイムを変えた。それまで教養研究が存在しなかったわけではないし、なにより竹内さん自身、70年代のおわりから「学歴」や「受験」や「出世」といったテーマの著作を刊行してこられた。では、なぜ2003年に出たこの本がヒットしたのかといえば、だれもがリアルタイムで漠然と感じていた「知の下方修正」現象にぴったりはまるタイトルを宣告的に貼りつけたからなのだろう。

竹内さんの仕事の魅力は、徹底した資料渉猟（巻末の参考文献リストは網羅的だ）、そしてその資料を教育社会学の理論と接続させる手捌きの鮮やかさにある。歴史研究がそのまま現代批評にもなりうることを示すお手本のような筆致だ。商売っ気というか「遊び」の要素が本のなかに必ず含まれていることも見逃せない。ビジネスパーソンにリーチするゆえんだ。テーマ設定の妙がある。それが可能となるのは、アカデミズムの方角だけを見ているわけではないから。第2章は、竹内さんとこの国の教養主義の系譜なり履歴なりをめぐって、あちこち時代を飛びながら進んでいく。経済状況と教養ブームの相関もひとつのポイントとなるだろう。

竹内さんとはじめてお会いしたのは、2010年にとある研究グループにお招きいただいたときだ。わたしが20代のころに書いた論文まで読んでくださっていて、たいそう恐縮した。どこの馬の骨ともわからぬ若手の仕事までカバーするアンテナの広さに衝撃を受けたし、なにより資料派教養主義の片鱗を垣間見る思いがしたのだ。対談収録の場所は関西大学。

（大澤 聡）

1　教養主義の起源をめぐって

大澤　教養を話題にするとき、歴史的な方面を専門にしている竹内さんや僕は、まっさきに「大正教養主義」[★1]について考えてみたくなりますね。

竹内　「大正教養主義」というワードを世間に流布させたのは唐木順三[★2]ですね。『現代史への試み』[★3]に所収されている「型と個性と実存――現代史への試み」でした。そのもとになったのは、『展望』一九四八年三月号に寄稿した論考「型の喪失」です。亀井勝一郎[★4]も同時期に「教養派」という節を立て、「大正的教養」とか「大正的教養人」[★5]といっています。

大澤　いまおっしゃった『展望』[★6]は筑摩書房の伝説の雑誌ですね。唐木が臼井吉見らといっしょに編集していました。初期には戦前の教養をふりかえる記事も多い。敗戦直後の創刊号には、三木清[★7]の遺稿「親鸞」[★8]も載りました。

竹内　それでいうと、筑摩書房は教養メディア的な出版社なんじゃないでしょうか。今回の大澤さんの本がそこから出るのも必然性があるのかもしれませんね。

大澤　教養主義的なイメージがつよい岩波書店[★9]と、修養主義的[★10]なイメージがつよい講談社[★11]。戦前にはこの二大出版社が出版文化のレンジをひろげていました。戦前は

★1　**大正教養主義**
第1章、註52を参照。

★2　**唐木順三**（からき・じゅんぞう　一九〇四～八〇）
評論家、哲学者。一九四〇年、同郷の古田晁、臼井吉見と筑摩書房を設立する。著書に『中世の文学』『無常』など。

★3　**『現代史への試み』**
唐木順三著、筑摩書房、一九四九年刊。

★4　**亀井勝一郎**（かめい・かついちろう　一九〇七～六六）
文芸評論家。著書に『転形期の文学』『大和古寺風物誌』など。

★5　**大正的教養／大正的教養人**
亀井勝一郎「現代人の研究」（『風雪』一九四九年八月号）における議論。同論はのちに『現代人の研究』（六興出版社、一九五〇年）に収録。

大宅壮一[★12]や戸坂潤[★13]あたりによって、戦後は蔵原惟人[★14]あたりによって「岩波文化vs.講談社文化」と図式化されることにもなります。いまふうにいえば、岩波がハイカルチャー、講談社はポピュラーカルチャーをそれぞれ代表していた。戦後になってそれらをハイブリッドさせた独特なポジションから出てきたのが筑摩書房だったといってみてもいいのかもしれません。

竹内　『展望』はリアルタイムで読みました。

大澤　あぁ、そうか。第二期が一九六四年に再出発するから、まさに竹内さんの青年期にあたるわけですね。

竹内　論考のほとんどがいわゆる政論から距離をおいたもので、時事問題をそのまま取りあげるということはあまりなかった。文化主義的なメディアでしたね。その意味では、教養主義的な総合雑誌[★15]だった。めずらしい雑誌ですよね。ファンも多かったと思う。大澤さんの整理をさらにふまえると、かつては「岩波的教養主義」と「筑摩的教養主義」の二系統があった。

大澤　性格としては、哲学よりの「岩波的教養主義」と、歴史よりの「筑摩的教養主義」でしょうかね。

竹内　いわば、文化史的教養ね。

大澤　そう、文化史的。その後者の象徴は「ちくま学芸文庫[★16]」かな。他方、「学

★6 **『展望』**
筑摩書房より刊行された月刊総合雑誌。一九四六年一月に創刊。五一年九月号で休刊。

★7 **三木清**（みき・きよし　一八九七〜一九四五）
哲学者。著書に『パスカルに於ける人間の研究』『人生論ノート』など。

★8 **「親鸞」**
三木清の遺稿。死後、疎開先の埼玉に残されていたものが戦後になって発見され、唐木順三が『展望』創刊号（一九四六年一月号）に掲載した。

★9 **岩波書店**
一九一三年、岩波茂雄（後出）が東京市神田区南神保町に古書店を開業。同年一二月に蘆野敬三郎『宇宙之進化』を、翌一四年に夏目漱石『こゝろ』を刊行し、出版業に進出。一九二七年に「岩波文庫」を、三八年に「岩波新書」を創刊。

芸」のつかない「ちくま文庫」[★17]でエンタメ方面もしっかりとカバーする。筑摩書房は一九九〇年代には『頓智(とんち)』[★18]なんて雑誌も出していた。

竹内　ありましたね。

大澤　こう見てくると、一九八〇年代に筑摩的教養主義をアップデートさせた松田哲夫[★19]の功績はやっぱり無視できません。さて、岩波的教養主義に話を戻して、教養主義そのものの源流をどこに見るかというあたりから検討していきましょうか。

竹内　それでいうと、旧制高校[★20]のパターンセッター（＝先導役）だった第一高等学校[★21]の学生文化に、知的若者層の変化が凝縮されていたと思う。

大澤　やはり教養主義の醸成場は一高ですよね。

竹内　明治期の第一高等学校って、かなりマッチョな文化だったでしょう。

大澤　ほとんど体育会系ですよね。質実剛健やバンカラが世間のイメージ。

竹内　「勤倹尚武(きんけんしょうぶ)」[★22]なんてスローガンも掲げられていました。「勤倹」は勤勉かつ質素ですね。「尚武」は武勇を尊ぶこと。

略

★10　**修養主義**
学問に励み、人格形成に努めることに価値を置く考え方、生き方。明治期の修養主義には実学志向が強く、立身出世をよしとする傾向があった。

★11　**講談社**
一九〇九年、野間清治により創立された大日本雄弁会がその前身。一一年に講談社となるも、二五年に大日本雄弁会講談社と改称。五八年、株式会社講談社となり、今日に至る。

★12　**大宅壮一**（おおや・そういち　一九〇〇～七〇）
評論家、ジャーナリスト。著書に『無思想人宣言』『炎は流れる』など。

★13　**戸坂潤**（とさか・じゅん　一九〇〇～四五）
哲学者、評論家。著書に『日本イデオロギー論』『世界の一環としての日本』など。